

## E.ジルソン「『聖杯の探索』における 恩寵の神秘神学」試訳

La traduction japonaise de « La mystique de la grâce dans la  
*Queste del Saint Graal* » d'Étienne Gilson

横山 安由美

Ayumi Yokoyama

中世思想史の専門家が、自分の研究が文学史と不可分であるとい  
うことを痛感するのは、『聖杯の探索』〔以下『探索』〕のような作  
品に接したときである。すでに13世紀の前三分の一期において、き  
わめて抽象的な神学的観想が、非のうちどころなく構成された俗語  
の一作品において表現されているということは、長い間思想史がそ  
の重要性を認めてこなかったフランス思想の一側面に強烈な光をあ  
てるものである。アベラールのような才気溢れる教師たちや、聖ベ  
ルナルやサン＝ヴィクトル派の神秘主義者に代表される、碩学の  
神学者たちの影響なしにパリ大学が誕生することはなかったという  
ことは、哲学者ならよく知っている。しかし、これらの巨匠を辿る  
だけの歴史は、フランス語の作者たちが、彼ら独自に、どれほど比  
類のない知的な世界を涵養したかを我々に忘れさせかねない。クレ  
チアン・ド・トロワのさまざまな物語を読めば、どれほど繊細な内  
面生活を描き、どれほど完全な明晰さでもって人情の機微を分析、  
加工しつつ、文学が12世紀末のフランスの聴衆を養っていたかがわ  
かるだろう。こう言い切ってもよからう。こうした作品に比較され  
てしまうと、ラテン語であれフランス語であれ、13世紀の学問的な  
便覧の類の方こそ、野蛮な衒学性という相貌を露呈してしまう、と。  
これらの俗語作品が時代の証人であるとするならば、哲学史家は、  
皮肉にも、この時代をこそ、洗練された文化の時代としてイメージ

しなくてはならないのだ。

だから我々は、『探索』のようなテキストの出版を、そしてその校訂者にして解釈者である人物〔アルベール・ポフィレ〕が我々に成果を示した研究を、大いなる感謝の念をもって受けとめなくてはならない。この作品は文学的な主題を用いて宇宙と人間についてのキリスト教的な概念を表現するもので、シトー派の影響下にある特定の環境から発出している、という彼の主張には留保なしに賛成できるだろう。シトー派の影響は、見落とししようのないかたちで随所に表れている。『探索』が抽象的で体系的な作品であるということも議論の余地なく、語る楽しみのためだけに漫然と書かれたような十行くらいの塊を見つけろといわれても、およそ不可能だろう。だがこの画期的なテキストは一つならぬ問題点を包蔵しており、我々はこれについて考えてゆきたい。象徴の活用にはたいへん興味をひかれるが、何も言うまい。まして、これまでほとんど誰も特定に成功しなかった複雑な系図の登場人物たちについては言及をひかえたい。本稿は神学的、キリスト教的、シトー派的な主題についてのみ言及することとする。それらを正確に解釈することで、作品全体の解釈が変わるかもしれない。それは「恩寵（恩恵）」*grâce*という主題である。我々が考えるとおり、もしこの概念が厳密な意味で『探索』の中心に位置し、この主題の展開によって物語が「愛の恍惚」*extases d'amour*——それはシトー派の神秘主義における恩寵の至高のかたちである——へと方向づけられるのならば、この作品が想を得た理念、そして作品が表現する深遠な理念は、知解による神の知ではありえず、恩寵、つまり愛徳によって魂に神を生かすことなのである。一言で言えば、『探索』は知のまわりにではなく、情のまわりにもっぱら組成されている。

題名が『探索』なのだから、最初に特定しなくてはならないのは、「聖杯」*Graal*そのものの意味である。もしこの象徴の解釈を誤ったり、あるいはもっと単純に、解釈において厳密さを欠くだけでも、

作品全体の意味を過つ危険を冒すことになるのは明らかである。幸いにも、作者はきわめて明瞭な諸情報を惜しみなく提供してくれているため、我々がこの種の混同に陥ることはないし、中世の教養ある読者なら誰でも知っているような神学の最低限の知識さえあれば、わかることだろう。

実際、冒頭から「ペンテコステの前夜に」という表現が登場し、それだけで急迫した事件が恩寵の徴のもとに生じつつあることが予感される。しかもその翌日に聖杯が初登場する。ペンテコステ（五旬祭、聖霊降臨祭）の日、それは聖霊の恩寵が使徒たちに下った記念日である。この設定は完全に明示的なものであるが、『探索』の作者はそれに甘んじていたわけではなかった。聖杯の登場の前に、「大きな、驚くべき雷鳴が鳴ったので、人々は宮殿が崩れ落ちるかと思った」(p.15, 1.8-10)。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」(2,2)という「使徒行伝」の記述を連想させる。そして著者は「炎の舌」を「一筋の太陽光線」に置き換える必要を感じつつ、直ちに次のように付け加えて誰にでもわかるようにした。「室内にいた者たちは聖霊の恩寵に照らし出されたかのようにだった」(p.15, 1.12)。つまり「一同は聖霊に満たされ」(使徒 2,4) たと同義である。ゆえに、この後に登場してその場に居合わせた者たちを心地良さで満たす聖杯は、明らかにキリスト者の魂が糧とする、聖霊の恩寵以外の何物でもない。しかしまだ誤解の発生を恐れる作者は、読者のために象徴を詳らかにし、アーサー王自身にこう説明させている。「なるほど、皆様方、ペンテコステというこれほど貴い日に、恩寵でもって我らに糧を与えたまうという、これほど大きな愛の徴を神がお示しくくださったことを、我々は大いに喜ばなくてはなりませんまい」(p.16, 1.9-12)。換言すれば、作者は絶対的かつ抽象的なまでにはっきりと聖杯の技術的な定義を与えずにはいられなかったのだ。こういう定義だ。聖杯、それは聖霊の恩寵であり、それはキリスト者の魂が飲み憩うところの尽きせ

ぬ甘美な泉である。〔隠者は明かす、〕「その泉はいくら汲んでも汲み尽くすことがない。それは聖杯であり、聖霊の恩寵なのである」(p.158, l.33 - p.159, l.2)。

『探索』を解釈するにあたってこの定義はきわめて重要であり、これについて議論の余地はない。老隠者がエストルに与えたこの解き明かしを忘れてはならない。この定義を修正しようとするのは、いろいろな危険を冒すことになるだろう。第一に、神学関連のことで13世紀の隠者をあげつらうこと自体、おこがましい。第二に、この定義自体がたいへん明瞭なので、波風を立てたり混乱を生じさせることなくこれを修正することはできない。少なくとも、解釈しようとする作品の文面においてそれに異議を申し立てる箇所が何もない限り、作者が提供する説明に字義どおりに従い、恩寵の神学的概念については、普通のシトー派のベネディクト会士がとらえるような意味において把握するのが、賢明な態度というものであろう。

最初に指摘したいのは、『探索』の物語全体における聖杯の属性の全てが、シトー派の神秘神学が恩寵に付与する属性と正確に同じであることだ。現れた聖杯は、食卓に料理を満たし、その風味や香りは各自の嗜好に合ったものであった。「それは宮殿の大扉から入ってきた。そして現れるや否や、あたかもこの世のあらゆる香料が振りまかれたかのような、たいへんすばらしい香りに広間は包まれた。……そして聖杯が卓の前を通過すると、その卓は一人一人が望むとおりの食べ物によって満たされた。」このことを物語は「聖杯の恩寵によって糧を与えられた」(p.15, l.33)と表現しており、聖ベルナル [クレルヴォーの聖ベルナルドゥス] も同じ用語を用いている。「なるほど、神の存在の味わいは、人それぞれの好みによって異なるものである。天から注がれる甘美なるものの風味は、多様な渴望をもつそれぞれの口を異なるかたちで飲ばせるにちがいない。」(Cant.Cant., sermo XXXI-7)

ではこの恩寵とは、どのようなものなのだろうか。聖ベルナル

が絶対なる必然性を証明するために『恩寵と自由意思について』を書いたことを思い出せば、恩寵が『探索』の中で第一義的に重要な役割を果たしていることは驚くにあたらない。堕ちた人間は、欲することはできるが、善を欲することができない、そういう意志をもつ。恩寵は神の賜物であり、我々を再び善を欲する状態に戻してくれる。「それゆえ、自由意思liberum arbitriumは我々を欲する者とし、恩寵は我々を善を欲する者とする。自由意思によって我々は欲し、恩寵によって善を欲する。」(De gratia et libero arbitrio, cap.6) このような視点から物語の意味を理解しなくてはならない。そうでないと我々は教義に面食らってしまう。全ての登場人物が恩寵に突き動かされ、そして天から下る恩寵の衝撃のなかで、自ら身を動かす。言い換えれば、全ての人間の行為は本質的に意志的である。したがって行為とは、良いものであれ悪いものであれ、意志的かつ人間的なものではあるが、良いものであるためには、恩寵がその人に神的な協力を行い、協働しなくてはならない。この恩寵の協力と協働がないと、我々の意志は悪と悪魔の奴隷になってしまう。老隠者がボオールに理解させようとしたのはこのことであり、彼は人間の意志が神と悪魔の間で揺れ動くことを忘れかけていたのだった。ボオールは述べる、「人間の心は船の舵〔古仏語原文では「櫂」だがジルソンは「舵」としている〕ですね、港にであれ難破にであれ、彼を思うとおりのところへ導くものです。」「櫂には」と隠者が言う、「それをつかんでいる漕ぎ手がいて、舵を操り、どこへでも望むところに連れて行きます。人間の心もそういうものです。善をなせば、それは聖霊の恩寵と助言に因るのであり、悪をなせば、それは悪魔のそそのかしに因るのです。」(p.165, 1.13-17) それは以下の聖ベルナルの表現そのものである。「自由な意志voluntasは我々を自己に属する者とする。悪い意志は我々を悪魔に属する者とし、良い意志は我々を神に属する者とする。……もちろん悪魔の力が、ではなく、我々の意志が、我々を悪魔に引き渡すのである。そして我々の意志

が、ではなく、神の恩寵が、我々を神に従わせるのだ。」(De gratia et libero arbitrio, cap.6) 我々の自由を用いてできることは、我々に呼びかける恩寵に身を委ねるか、我々を惑わす悪魔のそそのかしに乗るか、この二つのうちのどちらかである。

そうすれば、『探索』に巧みに織り込まれ、物語を作り上げているこれらの正確な神学上のモチーフが理解できるだろう。「恩寵なき意志の無力さ」(p.116, 15) : 武勇に長けた騎士ゴーヴァンは他の全ての者たちに先がけて聖杯の探索を宣誓するが、自己だけを信用し、秘跡の恩寵をなおざりにしたために失敗する。「神の恩寵がたっぷりと与えられた選ばれた者たちの救霊予定」: 完全なる者ガラアドは、恩寵が彼を導くのでなければ、何一つ自分自身では行わない。恩寵は、最初から誰にでも、そして求めるときにはいつでも、十分に与えられる。「我らが主は罪人を救うのにぐずぐずしたりなさらない。その人が、心の中や、考えの中や、なにかの善行において、神へと向かうことをお見届けになれば、すぐさま彼を訪ねておいでになる。」(p.123, 1.11-14) せっかく聖杯が訪れたというのに、魂の眠りから目覚めてそれに応えることのなかったランスロは、罪深い(p.59-61)。恩寵が見放し、滅亡へと追いやってしまう国、聖杯が立ち去ってしまうローグル王国は、贖いがたいほどに罪深い(p.274, 1.28-31)。しかし『探索』における恩寵の主導的な役割を実感するには、これらの抽象論を列挙するよりも、その具体例を見ていくことの方が効果的だろう。

この方針における最も簡明な方法は、その完全な化身である登場人物ガラアドを観察することである。『探索』の作者が、直ちにイエス・キリストの象徴と感じずにはいられないような諸状況の中にガラアドを提示していることは、すでに人々によって立派に論じられている。他方、ガラアドという人物の中にイエス・キリストと聖霊という二つの像が並立しているのは、意識的かつ意図的な設定と見なさなくてはならないのに、たんなる混同の結果であると解釈す

る向きがあり、こちらがむしろ伝統的になってしまっている。第一に、聖書それ自体が、物語の作者に両者を組み合わせる方策を述べ伝えているということ、第二に、聖霊の恩寵の全きかたちであり、かつ人間へそれらを分かち与える者としてのイエス・キリスト、という十全なる象徴的意味をこの並立によってガラアドが獲得しているということ、を以下で見てゆきたい。

円卓の騎士の前にガラアドが登場する場面が想を得ている聖書のテキストは、「ヨハネ福音書」20,19である。キリストの復活後のことである。ある土曜の晩、使徒たちが集まって、鍵をかけていた、とある家にイエスが現れる。彼らの真ん中に立ち、こう言う、「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そしてイエスは彼らに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と言う。『探索』においても同様に、扉も窓も全て閉じた宮殿の広間に円卓の騎士たちが集合し、そこに「深紅の甲冑を身に着けた一人の騎士」の手をとった一人の老人が現れる。その場にいた者のうちで、この二人がいかにして入ってきたのかわかった者は誰もなかった(p.7, l.11-28)。入るや否や老人は人々に言う、「あなたがたに平和があるように。」ダヴィデの末裔かつ「望まれた者」として作者が提示するこの〈騎士〉をイエス・キリストと認めることに躊躇はあるまい。その一方で、イエスは館に集う使徒たちに恩寵をもたらしたが、ガラアドが恩寵を携えて来たことは明示されていない。しかし作者は別の場所で、どのような象徴の下にこの事実を隠したかを説明している。聖書では、ペンテコステの日、炎というかたちで聖霊は使徒たちに降り立ち、彼らを世界中に遣わして福音を述べ伝えさせる。全ての扉が閉じているのにイエスは入って来て、彼らに聖霊を吹きかける。最後に、誰もがよく知っていることだが、イエスは洗礼者ヨハネに自分の到来を預言させており、イエス自身は、先駆者のしていたように水の中で洗礼を行うのではなくて、聖霊と火の中でそれを行う。また「使徒行伝」

自体も、洗礼者ヨハネの約束の履行として「炎の舌」というかたちでの聖霊の降下を描いていることも指摘しておいたほうがよいだろう。全使徒が待ち望んでいた洗礼は、聖霊の洗礼であり、それはイエス・キリストが行うものであった。彼らは待ち望まずにはいられなかった。昇天の日にイエスは彼らに現れ、この洗礼者ヨハネの約束をはっきりと彼らに思い出させ、それが実行されるまでエルサレムに留まるよう命じている。ゆえに、ペンテコステまたは聖霊の降臨は、洗礼者ヨハネが予告し、イエス・キリストによって使徒たちに与えられた、聖霊と火における洗礼のことにほかならない。

『探索』ではイエス・キリストと聖霊とが複雑に絡み合い、頻繁に一方が他方と入れ替わったりするのだが、このように理解してページを再読すると、綿密に聖書の文面に従っていることがわかり、「いかなるわけでその<騎士>が深紅の甲冑をまとって宮殿に来たか」(p.78, 1.6-7)が納得できてしまう。深紅の甲冑は、イエス・キリストがもたらした恩寵の炎の象徴である。「ペンテコステの日、彼ら〔使徒たち〕は全員ある館におり、扉は閉じられていました。そこへ聖霊が炎の姿で彼らの真ん中に降り立ち、彼らを励まし、彼らが抱いていた疑念を晴らしてくださったのです。……このように、ペンテコステの日に使徒たちに起こったのは、我らが主が彼らを訪れ、励まされたということでした。ですからそれに酷似したかたちで、その<騎士>はあなたがたを励ましに来たのだと思われまます。あなたがたは彼を主と思ひ、牧者と思わなくてはなりません。なぜなら、我らが主が炎の姿でいらっしゃったのと同じように、<騎士>は、炎と同じ色である深紅の甲冑をまとって現れたのです。そしてまた、我らが主の出現の際、使徒たちのいた館の扉が閉じていたのと同じように、<騎士>が来る前に宮殿の扉が閉ざされていたのです。」(p.78, 1.6-26) これを見ると、『探索』の作者は、使徒たちへのキリストの到来と聖霊の降下とを混ぜ合わせて作品の冒頭部分を構成したことが明らかだ。また、「ヨハネ」では聖霊を吹き込む

ためにキリストが使徒たちに現れ、「使徒行伝」ではキリストによる聖霊の洗礼を伝えるヨハネの約束を実現するために聖霊が彼らに降り立つことから、聖書そのものが作者にこの混合を示唆したこともはっきりとしている。最後に、もしガラアドがキリストの象徴であるならば、とりわけ恩寵の運び手かつ恩寵の付与者としてのキリストであるということもわかる。

すると直ちに、この物語でガラアドが特筆すべき役割を果たしていることが理解できる。作者は、彼のうちに他の騎士たちのような単なる聖杯探索の騎士を見ているのではなく、またその様々な冒険を完成させるべくあらかじめ予定された人物ということばかりでもなく、彼と共にいることで冒険の追求が良きこと、有益なことになるような、そういう人物として見ている。騎士たちは皆、三人の選ばれた者たち、とりわけガラアドと共に探索を続けたいという欲求をもっている。なぜならば彼と共にいると、彼が周囲に放つ恩寵に与るかのように感じるからだ。良き意志の者たちにとって気の毒だったのは、完璧への道において、いつもガラアドが彼らの遙か先を歩いてしまうということだった。助太刀に現れて、彼らを敵から解放する時でさえ、彼は疾風のように去ってゆく。早馬で消え去った後には、哀れなペルスヴァルが残され、徒歩で追いかけるがかなわず、意気消沈する(p.88, l.16 sv.)、といった具合である。最初から不在であるにせよ、見失うにせよ、〈探索〉の同志たちにとって、彼と離別することは真の絶望だった。「私〔ペルスヴァル〕が探し続けてきたあの〈良い騎士〉が、彼ゆえの悲しみのために私が死んだとお聞きになれば、高貴な方ですから、きっと我らが主が私の魂に憐れみをたれたまうよう祈ってくださることでしょう。」(p.89, l.19-22) この瞬間からガラアドは、その人の仲間となることが救済と完成の道に在ることを意味するような、恩寵が全きかたちで宿る例外的な人物の一人として見えてくる。

より詳細にテキストを分析すれば、『探索』の意味するところを

さらに明確にすることが不可能ではないだろう。この主人公は、神の恩寵が受肉し、かつそれを周りに振り撒く人物である。彼が現れるや否や、人々は俗世を諦め、恩寵の生を生きようと努力する。彼らは彼という人物に執着し、彼が回りに振り撒く救済の力の恩恵を受けようとする。だから彼は、見るからに聖人や精神的な指導者の類型に属する人物ではあるが、そればかりでなく、かなり厳密な特質をもった一人の聖人像に合致しているといえる。

第一に、作者はガラアドの身体的な美しさを入念に描いている。文学的な定型表現にすぎない、と思われるかもしれない。しかし実際は、まったくそうではない。ガラアドは恩寵の完璧な化身である。さて、恩寵というのは、魂の中に在ることで、本来的に、外へ、つまりこの魂が動かしている身体に「それと知らせる」かたちで、やがては現れ出る性質のものである。言うまでもなく、身体を通して現れ出るほどに強力な恩寵というものの自体、きわめて特殊な者たちの完成状態であるから、このような外的発現が実際に起こることはたいへん稀である。イエス・キリストは、ご自身の内面の崇高さを外的なかたちで表され、人々の目に明らかにされた。ガラアドもまた、次のように崇高さを表に表している。「彼はきわめて美しく、身体の均衡のとれた子供で、これに匹敵する者をこの世に探すことは至難の業だった」(p.2, 1.22-24)。それは、「驚異的なまでに全ての美を兼ね備えていて、およそその年頃でこれほど美しい人間の姿を見たことがないと〔ランスロが〕思うほどだった」(p.2, 1.30-32)子供である。さらに彼は、「この世で最も美しい騎士の一人である」(p.10, 1.18-19)。我々は、このガラアドのように美しい、恩寵にあふれた一人の聖人を、一人の精神的な指導者を、思い浮かべずにこれらの行を読むことはできない。しかもこれは完全にシトー派に属する著作と密接に関わるだけに、忘れようがない。それは聖ベルナルである。人間としての内面の美は彼において完璧であったため、それが外においていわば顕現し、人間の外見というかたちで表出し

ていた。その美は確かに霊的でありながら、その意味を解する力のある人々にとっては、同時に、現実的である美である。この高名なクレルヴォーの修道院長の特徴のいくつかをガラアドがそのまま具えるということはあるべきことではない。

最も顕著な特徴の一つは、二人とも、完全なる貞潔を愛し、等しく実践していることだ。彼らの身体において光り輝く美は、絶対的に清らかな魂の美であり、このような魂は純潔な身体にのみ宿る。ガラアドについて、彼の純潔性が例外的な重要性をもっていることはまさに〔ポフィレによって〕指摘されたとおりであり、それは『探索』の作者自身が何度も繰り返し主張している。聖杯の冒険を完成させる三人の騎士のうち、ガラアドとペルスヴァルの二人は童貞（純潔）viergeであり、三人目のボオールは貞潔chasteである。ここでガラアドの純潔性とペルスヴァルの純潔性それぞれの道徳的な意味合いを示しておく必要があるだろう。前者は、恩寵のおかげで、何ものも脅かすことのない清らかさを保ち続けている。後者はもう少しでそれを失いかけた経験があり、今現在純潔を保っているのは一種の奇跡的な出来事のおかげでしかない。したがって、厳密な意味で確実な純潔性をもつ類型と言っているのは、もちろんガラアドの方である。さて、ガラアドはまた、三人の騎士のうち、探索を完全な完成へと導く唯一の人物である。だから彼の純潔性と聖杯の冒険の解決の間には確かなつながりがある。この物語が、まさにく良き騎士の魂において完結を迎える恩寵の業を語るものであるならば、このつながりの強調は必須である。

注意して見ると、聖杯探索の到達点は、聖杯それ自体の性質と同じくらい、正確な言葉で規定されている。文学的な完成度という点ではあるいはこの作品は稚拙であるかもしれないが、緻密な一貫性をもって構築されており、作者は最初から、いかなる結末へと作品を導くのかを正確に意識していた。探索に加わろうとする全ての者に隠者ナシアンが語る前提条件、それは告白を行うことである。告

白によってあらゆる大罪から清められ、その結果恩寵の状態に入ることができる。「なぜならばこの〈探索〉はけっして現世のものごとの探索ではありません。我らが主の大いなる秘密、偉大な神秘の探索であり、至高の主が地上の騎士たちのなかから自らの僕としてお選びになった幸運な騎士に、はっきりとそれをお示しになることでしょう。彼には、聖杯の大いなる驚異を、死すべき心が考えることも現世の人の言葉が語ることもできないようなものを、お見せになることでしょう。」(p.19, 1.19-26) この一節は、適当に言葉を拾って作ったようなものではなく、念入りに選ばれた用語で紡がれている。聖杯の英雄たちが長く待ち望んだ終着点に至る瞬間にも、作者は同じ内容を逐語的に繰り返している。その正確な意味は何であろうか。

この箇所および同じ内容を儀礼的に反復するどの個所を読んでも、注意を引かれるのは、最後の部分である。「死すべき心が考えることも現世の人の言葉が語ることもできないようなもの」。聖パウロの二つのテキストが思い出される。それは中世ではたいへん頻繁に引用され、決まった用途で用いられていたため、問題の節全体の意味が直ちに明らかになる。一番目のテキストはパウロがイザヤ(64,4)から引いたものでパウロ自身の重要な注解が加えられている。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された。わたしたちには、神が霊によってそのことを明らかに示してくださいました。霊は一切のことを、神の深みさえも究めます。」(Iコリ2,9-10)

これはまさに、教義上同じ主題である。神の秘密は、恩寵、つまり聖霊の働きかけがなければ到達不可能であり、聖霊は「人の心に思い浮かびもしないこと」を我々に啓示する。パウロの第二のテキストは第一のものにたいへん近い内容なので、中世に頻繁に用いられた対照の手法によって、第一のものと自然に組み合わせられてきた。しかしそれと同時に、第二のテキストはたいへんわかりやすい事実

を浮かび上がらせるので、これをフランスの作家が引用することの意図については過ちようがない。聖パウロは言う、もしどうしても誇りたいのならば、主が見せてくださったことvisionsと主の啓示révélationsについて語りましょう。わたしは一人の人を知っていますが、その人は——体のままか、体を離れてかは知りませんが、神はご存知です——第三の天にまで引き上げられて、樂園にまで上げられて、そこで、「人が口にすることを許されない秘密の言葉」を耳にしたのです(IIコリ12, 1-4)。二つのテキストを総合すると、次のような結論に至る。聖杯の探索は神の秘密の探究である。それは恩寵なしには知りえず、またそれを知る者にとっても表現が不可能なものであり、つまりは、恍惚の探究である、と。残るは、『探索』がこの探究を表すのに用いた言葉の意味を明確にしてゆくことだけだ。

まず最初に、騎士たちは「靈的な」ものの探索に旅立つということを描きたい。この表現は、近代の同じ語が想像させるよりもはるかに強い意味をもっている。司祭がボオールに聖別されたホスティアを差し出す。ボオールは、パンの形色の下に主が見えるのですが、自分はそれを紗幕なしに観想したいと熱烈に願います、と言う。「私の目は、現世の目ですから、靈的なものを見ることができませんし、これ以外の見方をすることができません。ですから真<sup>まこと</sup>の姿が私には失われているのです。」(p.167, 1.4-8) ゆえにここで「靈的なもの」とは、身体的な意味に拠ることなく、魂にのみ立ち現れる神的なもののことである。この文面からすぐに思い浮かぶのは、感知しうるもの、想像しうるもの全てとの対比によって「靈的なもの」を定義し、この偏差によって神秘的な状態を分類することを示唆した聖ベルナルの重要なテーゼである。『探索』の作者が確かにこの教義を知っていて、何度も応用したとするならば、このつながりはますます重要である。自分の神秘体験の全てを枚挙した『雅歌について』において聖ベルナルは、「夢」*songe*によってなされる神

の啓示と、「直観（幻視）」visionによってなされる啓示と、「純粹思念」pensée pureに呼びかける啓示とを区別している。前二者も十分高次の神秘体験であるが、三番目よりは劣った位置にあり、精神のさまざまな欲求を十全に観想することができるのは三番目だけである。『探索』もこの分類を保っている。夢による啓示は、神秘的生の劣った位階にあるとされ、そのために湖水のランスロは、踏み越えたいという切なる欲求をもつにもかかわらず、彼方に行くことはできない。彼があるレベルの神秘的イニシエーションに達していることは疑いないが、長らく罪のなかで費消された彼の生は、純粹に靈的な恍惚に到達することを彼に禁じる。だから彼は神の秘密の一部分しか見ることができず、しかもいつも夢というかたちでしか許されない。それは彼にとって、同時に報酬でもあり、懲罰でもあった。なぜならそれは恍惚ではあったが、至高の恍惚ではなかったからだ。それに至るのはボオール、ペルスヴァル、ガラアドの三人だけである。

この三者もまた、直接に恍惚に至るのではなかった。十全な啓示を受けるまでは、彼らは感知可能な「直観」と部分的な「天啓（照明）」illuminationに甘んじることを余儀なくされた。聖ベルナルの言葉を借りれば、「〔神に〕近づくことはできるが、内奥に達することはできない。その神に対する畏れをもって偉大さを探求する者は、栄光によって圧倒される。」(Cant.Cant., sermo LII-3) かつてモードレン王が、その後ランスロが、これで苦渋を味わったのだが、三人の選ばれた騎士たちはそれを繰り返すことはない。コルブニックの驚異的事象と聖杯の典礼もいまだ直観にすぎず、神秘をそのまま目撃するわけではないし(p.271, 1.1-2)、ランスロ自身も部分的には聖杯の典礼に与っていた(p.255, 1.21-25)。三人に固有の、とりわけガラアドに特別に属する体験、それは神の「秘密」secrets、「内奥」intimités、「神秘」mystèresを見ることである。これはシトー派の神秘神学が定着させた用語で、純粹に靈的な直観のみを意味し、この

ヴィジョンは最も高次の像をも越えて、純粹な靈の世界で息吹くものである。聖ベルナルはこの至高の体験を「この最高に甘美な秘密の体験」 *suavissimi arcani hujus experimentum* と名づけている。彼はまた、神が親しき者にのみ明かす「秘密ごと」 *privetez* も知っており、恍惚の中で神が我々に自らを啓示するときの「親密さ」 *familiaritas* についてしばしば語っている。したがって、『探索』が完全なるシトー派的靈性のうちに息づいていて、作品全体が終局の神秘体験へと展開していることについては、疑いようがない。

この事実を認めるならば、何よりも、聖ベルナルについての記憶が『探索』の作品構成に対してどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしなくてはならない。純潔性や貞節性や修徳（禁欲主義）によって恍惚へと歩む主人公たちは聖ベルナルの模倣者にほかならない。ベルナルと同じように、ガラアドも純潔で法悦の人とされた。一瞬でもそれを疑おうというのならば、聖ベルナルが同時代の誰から見ても典型的な恍惚型の人物であったことを意図的に忘却するほかはない。彼は『雅歌について』と『神の愛について』の神秘主義的な著作家であり、その頂点にあるのは恍惚体験の理論だった。さらに言えば、彼自身が、神との合一という至高の恩寵を与えられた恍惚体験者であり、神に選ばれた者にのみ与えられる超自然的な歓びの何たるかをよく心得ていた。当時彼を見たり聞いたりしたシトー会の修道士たちにとって、聖ベルナルという人物がどのような存在であったかを思い描くことは、今日ではいささか困難であるかもしれないし、あるいは不可能であるかもしれない。質素な壁に囲まれた礼拝堂の中にある、赤毛で白きかおのやせこけた男。隠れた魂の熱さが頬骨を赤く染めている。彼らの中央に立ち、彼らに話しかける同じその男が、神を見ていた。それは、ついぞ到達できないのではないかとおびえ、震えながらも、誰もが希求していたことがらではなかったか。それを彼は、いつとき本当に獲得し、手につかんだのだ。神との合一の経験がないのではないとベルナルが

白状したとき、これらの修道士たちの胸を締めつけた想いをいかに甦らせることができようか。「それはいったい何なのだろう？それが何なのか知っている、私は言えるのだろうか？……もっとも、もし私が全く何も知らなかったのならば、何も言いはしなかったことでしょう。」(Cant.Cant., sermo XXIII-9) その百年以上後、神に達するよすがとしてダンテが見出したのは、ほかならぬこの、熱烈な愛徳の使徒にして法悦の人、ベルナルだった。ベアトリーチェ自身、最後までダンテを導いたわけではなかった。ベルナルの愛だけが、詩人をさらに彼方へと導いたのだった。『神曲』について話を終える前に、『探索』を真の結末に導くのもその彼であることを指摘しておこう。

そうならば、作品全体の神学的な構成は厳密なものであり、解釈にあたってさまざまな帰結を引き出すことができる。まず第一に、作品全体が、直接「神」という概念のまわりにではなく、「恩寵」という神学的主題のまわりに組成されているということが明らかになる。これは厳密な意味で恩寵についての物語であり、あるいは、物語というかたちで語られた、キリスト者の魂における恩寵の生の諸相であるとも言える。冒頭の聖杯の登場から最後のガラアドの恍惚まで、そのあらゆる段階が描かれている。恩寵の源である秘跡に頼ろうとしないゴーヴァンへの非難。探索の道半ばで死を迎えるが、恩寵を得て神と和解して死ぬ、イヴァンのような騎士たち。神秘体験にまで上りつめるが不完全であり、つらい悔悛を代償として課されるランスロのような者たち。恩寵によって、万事休すという瞬間に災厄を逃れたり、墮落しかけたその瞬間に救われたりする、ボオールやペルスヴァルのような者たち。そして、恩寵の賜物全てで満たされ、最後の時まで超然と立つ、ガラアドという唯一の、人物。彼らの冒険は、なおざりにされ、失われ、再び見出され、保持され、いや増した、恩寵の冒険である。作者はそれを物語に置き換えて、円卓の騎士の世界が供給しうる全てのイメージをちりばめたのであ

る。

第二に言えることは、恩寵の生の仕上げである神秘的合一と恍惚が、物語の結末とされていることだ。ナシアンは〈探索〉の開始を宣言する際に、勝者に与えられる至高の報酬は神の秘密を明らかに「見る」ことである、と告げている。作品の始めから終わりまで通底するのがこうした作者の意図であるならば、それをよく示しているのが、道半ばにしてのランスロの探索の放棄である。彼はいったん恍惚の夢に至りながら、アーサー王の宮廷に帰還してしまう。恍惚の夢は靈的完成の頂点であり、彼個人、本来それに接近できる器であった。その後ランスロは贖罪の衣をまといつづけ、死が彼を連れ去るときまで悔悛の生を送るのだが、彼はもはやいかなる神秘的啓示も望まないという意味において、彼にとっての探索はすでに終了している。この解釈は先に提示した解釈と少しも矛盾しない。物語が恩寵の物語である限りは、聖杯の探索は恍惚の探究であり続けるのだ。両者は互いに補完関係にあり、恍惚は、キリスト者の魂における恩寵の生の至高の開花であるからだ。自分なりの救済を得る一般の信者たち、それから神の臨在を享受する神秘体験者たち、いずれも聖杯によって養われる。ただし法悦の人々は神のテーブルに座すのに対し、そうでない者たちは祝宴から零れ落ちるパン屑で満足しなくてはならない。最も慎ましやかな満足から、最も高邁な充足まで、それは全てのキリスト者の魂が得る生の諸相である。探索の目的として恍惚を想定すること、それはだから円卓の騎士たちに完全な状態での恩寵の生を付与することだった。

そうであるならば、このような作品を解釈する作業は、予想以上に骨が折れる。というのも、解釈を極限まで押し進めると、従来作品の特質を要約してきたいろいろな表現の意味が完全に転倒してしまうからだ。『探索』を修徳主義ascétismeと神秘主義mystiqueの二語で要約しつつ、そしてこれは「シトー会が理解していたような意味でのキリスト者の生の表現」と〔ポフィレのように〕言い切るこ

とが可能なのかどうか。まずこれについて深く考えてみよう。もし作品全体がシトー派的神秘主義に想を得ているならば、主知主義的な意味を作品に与えることが極めて難しくなってくる。しかし読者がこのテキストに接して普通に思いつくのは主知主義的な意味の方である。シトー派と主知主義は互いに並ぶ二つの立場であり、この物語が両者を和合させる方策を見出したとするならば、それはおよそ中世哲学史上類を見ない出来事である。12世紀の真の主知主義といえばアベラールであり、よく知られているように、その不倶戴天の敵こそが聖ベルナルであった。そしてもし、「知解」intellectによる神の知と「完全状態」perfectionの頂点の一致をもって宗教的生の理想とするのならば、こうした態度を実際に位置づけることができるのは、どう考えても13世紀のもっと遅くなってからのことである。実のところ、『探索』の著者を主知主義的発想に感化された者と見なすことは、彼を50年ほど中世哲学の流れに先行させることであり、聖ベルナルの弟子を聖トマス・アクィナスの生徒にすり変えてしまうことに等しい。

残る作業は、この物語が恍惚を描写する際の語彙の用例を説明することだ。そうすれば、そこに込められた解釈がおのずから浮かび上がってくるだろう。「はっきりと見る」、「はっきりと見せる」、「見る」、「知る」などの語は、字義どおりに取る以外にとらえようがあるのだろうか。そもそも、もしこれらが主知主義的な知の理想形を表しているのならば、いずれにしても、作品のシトー派的性格を引き続き見てとることを放棄しなくてはならないことだろう。そしてまた、1260年より前の時期に、かつシトー派的理想に通暁した人物にとって、これらの語の字義的な意味がいかなるものであったかを考える必要がある。

このような課題は、『探索』のテキストしかもたない人物には、およそ解決不可能であろう。より正確に言えば、そうした問題を提起することすら思いつかないだろう。さて、シトー派の神秘学派は、

認知にかかわる表現を用いて本質的に情的な状態を表現するのを固有の特徴としている。さて、シトー派の神秘主義者にとって、神に到達する方法は二つある。この世での恍惚と、あの世での「至福直観」*vision béatifique*である。さて、この世では、「神を見る」ことは不可能である。したがって神秘主義者が神に到達できるのは愛と情によってであり、知解によってではない。あの世では、選ばれた魂は至福直観を享受するが、そこで「神を見る」こととは、愛と、その結果である至福によって、神の認知を無限のものとするだけでしかない。この教義の特異性を理解するには「至福」*Béatitude*についてのアウグスティヌス的概念とトマスの概念の対立の歴史を視野に入れることが簡便である。情意的であるアウグスティヌス派とシトー派にとっては、至福をなすのは愛による神の享受である。主知主義的なトマス派にとっては、至福とは知解による神の知であり、神への愛はその結果生じることにすぎない。

シトー派のベネディクト会士はアウグスティヌス派であり、聖ボナヴェントゥーラのようなフランシスコ会士が着想を得ているのも同じく典型的な情意的な神秘神学の諸相である。したがって、彼らの用語を解釈する際にも、『探索』の用語解釈と同じく、知の地平から愛の地平への読み替えが不可欠になってくる。最も人口に膾炙した文章の中で、聖ベルナルは、恍惚と至福直観が、神に在る魂の「液化」*liquéfaction*、あるいは「溶解」*dissolution*のようなものであると述べており、神を「見る」ということはまさにこのことなのだとして声高に結論づけている。シトー会士ギヨーム・ド・サン＝ティエリの最も重要な作品のいくつかは聖ベルナルの手になるものと長い間見なされていたのだが、この人物は体系的に「愛」を「知覚」*connaissance*の用語を用いて表現したことで中世哲学史家の間で知られている。例を挙げてみよう。神秘的な魂にとって、伴侶を「知る」こととは、彼を「愛する」ことにほかならない、なぜならばこのような場合、「知る」のは「愛」自身だからだ。「花嫁が花婿

を知ることと、愛することは、同じである。なぜなら、ここでは、愛それ自体が知覚であるからだ。」(Expos.sup.Cant., cap.1) 最も有名な著作の一つで、彼は次のように説明する。見るためには、なんらかのかたちで、見られるものへと変じなくてはならない。同様に、神を知るためには、魂が神の似姿に変じなくてはならない。愛する者を愛される者に似せるのは愛であるから、神を知ることを可能にするのも愛である。そこから出てくるのが、「すなわち、魂の感覚 sensusは愛amorである」というギヨーム・ド・サン＝ティエリのたいへん面白い表現である。「まことに、魂の内的な感覚は知解intellectusである。しかし、そのより偉大で尊い感覚は、そしてより純粹な知解は、愛である。もしそれが純粹であるならば。というのも、創造主自身が被造物の側から感知されたり理解されたりするというのならば、創造主は被造物によって、まさにそのような感覚で感じられ、そのような知解によって理解されるからにはほかならないからだ。」(Spec.fidei, cap.10) 各語に拘泥し、ここで「知解」intellectusという語がまとうひとえに感情的な意味を忘れさえすれば、これはこの上ない主知主義的な文章ということになるだろうが。「神の直観において、ただ愛だけが作動する」とギヨームが言うとき、この「直観」visionは何よりも聖杯の驚異の目撃を想起させる。「見る」、「知る」とは、ただ「愛する」ことでしかない。

シトー会の神秘主義的な用語はこのような意味合いと不動の価値とを有するのであり、恍惚や至福直観についてのいかなる主知主義的な概念もおよそ1260年以前には明瞭なかたちをとることはなかったとするならば、『探索』の神秘主義的な用語法をシトー会的にとらえる以外の正当な解釈がいったいどこにあるのか考えてみるがいい。答えは言うまでもない。この作品が聖ベルナルの影響下にあることはあらゆる証拠が指し示しており、全体の構成は厳密なまでの一貫性を保っている。研究すればするほど深く掘り下げることができるだろう。そのような作品である『探索』は、その出所となっ

た環境と完全なる調和のうちに解釈されなくてはならない。だから、我々がそこに見出すのは、知の賛美ではなくて、愛の賞揚である。『散文ランスロ』の一群はいわば中世の愛の大全である。恩寵の作用のもと、人間の愛から神の慈愛の完全無欠な華が生まれるように、ガラアドはランスロから生まれ、ランスロを超えるのだ。

---

#### 後書

本稿は、Étienne Gilson, “La Mystique de la grâce dans la *Queste del Saint Graal*”, *Romania* 51(1925), p.321-347 (フランス語) の試訳である。『聖杯の探索』は13世紀前半に成立した作者不詳の古仏語物語で、通常『散文ランスロ(ランスロークラアル)』と呼ばれる一連の物語群の一つに数えられる。本稿が執筆された1925年当時、聖杯物語を含めて中世の俗語文学研究の主流を占めたのは文献学的アプローチであり——その中心人物ガストン・パリスの「俗語文学にはなんら哲学的価値が無い」という価値判断をジルソンは本稿注において批判している——、それと同時に、ケルト神話から聖杯の意味と起源を「全て」解明しようとするアメリカ系の研究などが台頭しつつあった。また数多くのキリスト教的解釈の中にも、たとえば東方教会の典礼に固執するなど、偏陋な研究が少なくなく、こうした状況下で中世哲学の権威が執筆したのがこの論文である。ジルソン(1884-1978)の態度は簡明である。本文中にあるとおり、「その出所となった環境と完全なる調和のうちに」、「中世の教養ある読者なら誰でも知っているような神学の最低限の知識」に沿って解釈すること、である。

ジルソンはポフィレの校訂版(Albert Pauphilet (éd.), *La Queste del Saint Graal*, Champion, 1923)の出版を歓迎し、援護する目的でこれを執筆した(本文中の『探索』のページ数は上記による)。両者の作品に対する態度は基本的に一致しているが、聖杯とは何か、という最重要問題について、ポフィレの「聖杯=神」説を修正し、聖杯は「恩寵」であることを、ジルソンは豊富な神学的知識によって論証している。いつになく緊張をはらみ、それでいて泰斗の矜持を滲ませる文体の背後には、同意しがたい多くの先行研究の存在がある。もちろん文学的・文献学的な意味でジルソンが無謬であるとは言えず、その後の80年近い年月にさまざまな新しい研究が公刊されてはいるのだが、神学的背景から発した解釈として、いまなお聖杯文学研究の要須とすることができよう。

なお、ロマニア誌の論文には、本文とほぼ同量の豊富な注がつけられているが、今回は紙面の都合上割愛し、本文のみの訳出とした。作業にあたって

---

下記の本を参照させていただいたことを、謝意とともに記したい。

- 天沢退二郎訳『聖杯の探索』人文書院、1994
- 上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成10』平凡社、1997（とりわけクレルヴォーのベルナルドゥス「恩恵と自由意思について」梶山義夫訳）